

● 関 西

よこ はら せん し
横 原 千 史

関西ではコロナ禍の活動停滞からの回復の兆しが見え始めた。それが顕著だったのはオーケストラで、外国人指揮者とソリストは変更となったが、定期的な演奏会は復活し、延期となっていたものも追加公演となったため、回数はかなり増えた。関西フィルハーモニー管弦楽団は、前年50周年を迎え、それを記念して大阪国際フェスティバルと共催で「ワーグナー特別演奏会」を企画した。縮小されて実現したこの公演は桂冠指揮者飯守泰次郎が指揮し、ワーグナー音楽のはらむドラマを立体的に構築し、ワーグナーを聴く醍醐味を存分に味わわせてくれた。この見事な成果に対し、音楽クリティッククラブ賞本賞が贈られた。常任指揮者藤岡幸夫は宮田大の独奏で菅野祐悟のチェロ協奏曲を新作初演した。また50周年記念事業として藤岡指揮でシベリウス交響曲全集の優れたCDをリリースした。音楽監督デュメイが久し振りに指揮台に立ちチャイコフスキーなどを演奏した。客演では高関健の指揮でシオスタコーヴィチの交響曲第8番が緻密な名演であった。

大阪フィルハーモニー交響楽団では、音楽監督尾高忠明指揮でブルックナー交響曲第9番とマーラー交響曲第4番が特筆すべき出来であり、特に後者の緩徐楽章の美しさは絶品であった。井上道義指揮のベートーヴェン《英雄》、マーラー交響曲第1番も生き生きとした演奏であった。客演では高関健のドヴォルジャーク、辻彩奈独奏のブリテンのヴァイオリン協奏曲、齊藤一郎指揮のスペイン・プログラムが印象に残る。日本センチュリー交響楽団は、首席指揮者飯森範親による《プルチネッラ》の緻密かつ土俗的な解釈や《シェヘラザード》の個性的なテンポで秀逸であった。秋山和慶のラフマニノフ交響曲第3番も快演。大阪交響楽団では、桂冠指揮者外山雄三によるブラームス交響曲第2番と第4番が巨匠らしい立派な演奏であった。次期首席客演指揮者高橋直史によるモーツァルト後期交響曲集も魅力的であった。阪哲朗指揮によるヴァイルの交響曲第1番も聴き応えがあった。京都市交響楽団は常任指揮者広上淳一によるマーラー交響曲第5番が大胆で情熱的な解釈でよかった。客演で沖澤のどかのフランス・プログラムが目された。兵庫県立芸術文化センター管弦楽団では、音楽監督佐渡裕のブルックナー交響曲第7番が傑出していった。客演ではスダーン指揮、竹澤恭子独奏のベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲が雄大なフレーズで説得力があった。

いづみシンフォニエッタ大阪は例年のように新作はなく、ヒグドン、酒井健治、カーゲル、ツェムリンスキーなどの作品を取り上げた。音楽監督の西村朗とアドヴァイザー川島素晴はシンフォニエッタのメンバーの室内楽で良質なレクチャーコンサートを行っている。アンサンブル神戸は矢野正浩指揮によるR.シュトラウス《メタモルフォーゼン》の優れた演奏で、文化庁芸術祭優秀賞を受賞した。テレマン室内オーケストラは、CD発売と連動して、延原武春の指揮でテレマンの協奏曲集などを披露した。神戸市内管弦楽団は、音楽監督に鈴木秀美が就任し、ベートーヴェンとメンデルスゾーンの交響曲を新鮮なアプローチで演奏した。オオサカ・シオン・ウィンド・オーケ

ストラは、宮川彬良指揮で、組曲《宇宙戦艦ヤマト》を定期演奏会で取り上げ好評を博した。大阪コレギウム・ムジクムは、当間修一の指揮で、山中千佳子の新作《今宵、おなじ風が》を初演した。

オペラも少しずつ上演されるようになってきた。びわ湖ホール《ローエングリン》は、芸術監督沼尻竜典の指揮で、セミステージ形式ながら、福井敬（ローエングリン）、森谷真理（エルザ）、妻屋秀和（ハインリヒ王）、谷口睦美（オルトルート）、大西宇宙（伝令）らの名唱と京都市交響楽団の優れた演奏で、ワーグナー中期のロマンティック・オペラのダイナミックかつ透明なテクスチュアを存分に楽しむことができた。ブッナーニ《つばめ》では中村恵理と熊谷綾乃の歌唱が光り、後者には文化庁芸術祭新人賞が贈られた。堺シティオペラの《トゥーランドット》も題名役の並河寿美を中心とする優れた演奏で感銘を受けた。関西歌劇団の《アドリアーナ・ルクヴルール》は北野智子と藤田卓也の名唱と井原広樹の優れた演出で、コロナ禍での関西歌劇団の総力を挙げての素晴らしい上演が、とかく沈みがちな我々に元気を与えてくれたことは間違いない。兵庫県立芸術文化センターの《メリー・ウィドウ》は、佐渡裕指揮、広渡勲演出の改訂新制作だが、並河寿美（ハンナ）と大山大輔（ダニロ）の名唱とカラフルで、ゴージャスでエネルギー溢る舞台で、その弾ける熱気は、コロナの憂さを吹き飛ばしてくれた。関西二期会の《オテッロ》は、題名役が不調だったが、細川勝と米田哲二（イアーゴ）、福田祥子と畑友実子（デスデーモナ）は素敵な歌唱を聴かせてくれた。みつなかオペラは、《ドン・ジョヴァンニ》を中堅・若手のキャストで見事なアンサンブルを聴かせた。その中では特に梨谷桃子（ドンナ・アンナ）が光っていた。新作オペラでは太田真紀（ソプラノ）と山田岳（ギター）の企画制作で、足立智美《ロミオとジュリエット》が初演され（演出：あごうさとし）、二人の演奏家で作る斬新なオペラの成果に対し、文化庁芸術祭大賞が贈られた。

室内楽で特筆すべきは、ヴァイオリニスト石上真由子がブラームスのソナタや六重奏曲など、複数の演奏会で新感覚の演奏を披露し、クリティッククラブ賞奨励賞に輝いたことである。後藤龍伸、田中美奈、船岡慶、高橋将純らのアンサンブルで、ベートーヴェンの七重奏曲とシューベルトの八重奏曲を演奏し、その美しさに酔わせてくれた。マリンバの中田麦の「三善晃、一柳慧の音楽」も興味深い取り組みであった。

ピアノリサイタルでは、中野慶理のリスト《ソナタ》、鈴木智恵の鈴木英明作品、有馬みどりのブラームスのソナタ第3番、多川響子のラフマニノフ前奏曲、土井緑のドビュッシー作品、青井彰の《クライスレリアーナ》、伊藤恵のベートーヴェンソナタ第28番、加藤英雄ベートーヴェンソナタ全曲シリーズが深く印象に残った。

今年は朝比奈隆の没後20年で、それを記念してシンポジウムと演奏会が開かれた（企画：吉川智明）。また朝比奈が創設した関西歌劇団は朝比奈訳詞によるオペラ・ガラコンサートを開いた。これらが大盛況だったことは、関西では朝比奈人気が衰えていない証左である。

コロナ禍の終息と演奏活動の十全な回復と展開を願ってやまない。